

第30回山梨県芸術祭

芸術祭30周年記念音楽会

と き 昭和 52 年 11 月 27 日 (日)
12時40分 開 場
13時 表 彰 式
13時40分 開 演

と ころ 山 梨 県 県 民 会 館 大 ホール

出 演 山 梨 県 芸 術 祭 30 周 年 記 念 音 楽 会
合 唱 団 ・ 吹 奏 楽 団 ・ オー ケ ス ト ラ
マ ン ド リ ン オー ケ ス ト ラ

主 催

山 梨 県 教 育 委 員 会
山 梨 県 芸 術 祭 実 行 委 員 会

芸術祭 30 周年 記念表彰式

次 第

被 表 彰 者

開会のことば

寺田重雄 加賀美子麓 中村鬼十郎 曾根崎保太郎

県教育長あいさつ

堀内孝恵 加藤和夫 手沢宗信 宮沢梅香

実行委員会長あいさつ

竹内研翁 野中尚山 中山梅三 瀬田千作

表 彰

丸茂司夫 田中郁子 飯島国男 藤巻信夫

秋山 亮 大庭三郎 中村 淳 小柳津 浩

梅津幸三 荘司存良 丸茂紘義 志村喜和代

被表彰者代表謝辞

堀田絵勢 久松照豊 山田清治 荻原徳憲

閉会のことば

安達一要 稲葉一溪 舟橋一喜 青木辰雄

小林勝重 内藤成雄



山梨県教育委員会

教育長 丸茂高男

昭和23年と云えば戦後間もない
 時期で、政治的にも経済的にも大
 変混乱をしていた時期であります

が、この時期に荒蕪した県民の心に豊かさを与えよう
 と、山梨県が全国の都道府県に先駆けて芸術祭を発足
 させたことは、全国に誇り得ることのできる一つであ
 ると思います。

県芸術祭の30年の歴史は県民生活に大きく関わって
 まいりました。現在、「参加する芸術文化活動」が叫ば
 れていますが、今や県芸術祭を中心に県下のほとん
 の市町村で、文化祭などの文化活動が開催されるよ
 うになり、芸術文化活動を県民生活に定着させる大きな
 推進力としての役割を果たしてまいりました。

県芸術祭の30周年を記念して、本日、ここに記念音
 楽会を開催したのでありますが、県下の 洋楽関係者
 600人余りと云う多くの方々の参加を得て開催できま
 したことを、主催者として、関係者のみなさんに心か
 らお礼を申し上げるとともに、これを契機として県芸
 術祭が、県民のための芸術祭として一層飛躍されます
 よう心からお願いし、ごあいさつと致します。



県芸術祭実行委員会

会長 荒井碧堂

山梨県芸術祭は、県民多数参加
 のもと、9、10、11月と3カ月間
 にわたり各種各部門の行事が展開
 され、それぞれ第30回という記念すべき祭典にふさわ
 しく開催されました。

本日はその総決算とも云うべき県芸術祭30周年記念
 音楽会が開催されることとなったのでありますが、真
 にその掉尾を飾る行事にふさわしく、県下の洋楽関係
 者600人余りと云うかつてない多くの方々が一堂に会
 して、開催できましたことは誠に欣快の至りと存じ、
 主催者の一人として関係者のみなさんに心からお礼を
 申し上げる次第です。

さて、県芸術祭も本年を以って30年の歴史を経たの
 であります。現在、この30年の歴史を卒直にふりか
 えり、今後一層県民のみなさんと固く結びついた芸術
 祭として発展するための資とするため、「県芸術祭30
 周年記念誌」の編纂をすすめております。来年3月頃
 には刊行の運びとなると思いますが、ぜひご期待をい
 たいただきたいと思ひます。

今後とも、一層県芸術祭に温いご支援ご協力を賜り
 ますようお願いして、ごあいさつと致します。

記念音楽会

混声合唱組曲「水のいのち」 指揮 大庭三郎	高野喜久雄 作詞 高田三郎 作曲 出演 混声合唱団 伴奏 原百合子
接続曲「甲州路を行く」 指揮 平野広海	矢野勝夫 作曲 出演 吹奏楽団
混声合唱「山に祈る」 指揮 近藤幹雄	清水 脩 作詞・作曲 出演 吹奏楽曲団 混声合唱団
序曲 イ長調 指揮 飯島国男	ヴェルキイー 作曲 出演 マンドリン・ オーケストラ
幻想曲「麦まつり」 指揮 飯島国男	マチヨッキ 作曲 出演 男声合唱団 マンドリン・ オーケストラ
小交響曲「マンドリンの群れ」 指揮 飯島国男	ブラッコ 作曲 出演 マンドリン・ オーケストラ
序曲「エグモント」作品84 指揮 三鬼日雄	ベートーヴェン 作曲 出演 交響楽団
ピアノ協奏曲ニ長調K537「戴冠式」 指揮 三鬼日雄	モーツァルト 作曲 出演 交響楽団 ピアノ 大西喜久代
フィナーレ 県民愛唱歌「緑のふるさと」 全員合唱	岩谷時子 作詞 浜口庫之助 作曲

混声合唱組曲「水のいのち」 作詞 高野喜久雄・作曲 高田三郎

この曲は、日本の合唱曲の、名曲中の名曲である。アマチュア合唱団のあいだで最も多く歌われている。

この曲は、TBSの委嘱で作曲され、1964年11月に、山田和男の指揮、日本合唱協会の合唱により放送初演された。のちに作曲者自身の手で、女声用、男声用の楽譜も書かれている。〈雨〉〈水たまり〉〈川〉〈海〉〈海よ〉の5曲からなるが、今日は、この中の〈雨〉〈川〉〈海よ〉の3曲が歌われる

〈雨〉は、Lento tranquillo でたんたんと歌われる、清らかな曲である。

〈川〉「何故さかのぼれないか、なぜ低いほうへゆくほかはないのか」と、自からに問うようにフォルティシモではじまる。つづいて8分の12拍子（変ロ短調）で、大きな川の流れるように曲は進行する。再び、「おお、川は何か。川は何かと、問うことをやめよ。」と、自問自答し、8分の12拍子の流れがくりかえされる。

〈海よ〉は、フィナーレにふさわしく、やさしさと雄大さを兼ね備えた、スケールの大きい曲である。「あこやがい」とのことばが、エコーのように重なるところは印象的だ。水のいのちは、最後に水蒸気となって天に昇って行き、曲は結ばれる。

作曲者の高田三郎は、1913年名古屋に生まれた。1956年以降の作品は合唱曲が多い。寡作だが、みがきぬかれた名作ばかりである。

接続曲「甲州路を行く」

矢野勝夫 作曲

斐の国と武田信玄、戦国時代を代表するこの武將を民謡の調べにたくした「武田節」又古くから北巨摩地方を中うたわれた「縁古節」。

「甲州路」は、この二曲をテーマに、甲州のすばらしい自然の印象や素朴な人々の活気にあふれる生活の営みを表しています。

は、甲州路の夜明けを表わす、ユーホニュームのメロディーで始まります。

明けと共に旅人の甲州路えの出発です。

朴な風物や、人々の生活を表わす、民謡調のメロディが演奏され、曲は、次第に盛り上がり、小休止符の後、武田の出陣を表わす、力強いメロディが演奏され、そして武田節の主題が現われます。

がて、男声合唱のハミングにより武田節が朗々とうたわれ、それが終ると、エレキギターによって縁古節の物悲メロディーが、バンドの伴奏で演奏されます。

がて、この二曲は同時に演奏され、そして終曲へと入ります。かるやかで、生き生きした祭りのリズムにのって、次第に盛上って、壮大なひびきのうちに終わります。

、この曲の作曲者である矢野氏は、現在陸上自衛隊東部音楽隊員で、この曲の他にも作曲編曲者として活躍されます。

混声合唱「山に祈る」

清水脩 作詞作曲

「山に祈る」は、清水脩氏の構成、作詞・作曲によるもので、「山の歌」「リュック・サックの歌」「山小屋の」「山を憶う」「吹雪の歌」「お母さんごめんさい」の六曲から成る合唱組曲である。

この曲は、昭和34年に、男声四重唱と小管弦楽のために書かれたものであるが、その後、作曲者自身の手によってピアノ伴奏つきの男声合唱や、混声合唱に、また、男声四重唱とバック・コーラスと管楽器のための曲に編曲され発表以来全国各地の合唱愛好者に親しまれているものである。

昭和34年に、長野県警察本部は、「山に祈る」という小冊子を発行して、遭難防止を訴えた。合唱組曲「山に祈る」は、この小冊子に記されていて、上智大学山岳部の一学生の遭難をとりあげ、この学生が残した日記と母親の手紙をもとにして構成された音楽物語である。

作曲者清水脩氏は、この曲について次のように言っている。

「全体の構成の上で特に言っておきたいのは、母親の朗読で物語の筋を進め、歌はその外側にあって、物語の情景情緒を表現する役目を果している。従って、主人公の元気な姿から死にいたる筋に合わせて、最初の『山の歌』から最後の『お母さん、ごめんさい』にいたる六曲の歌は、明るい曲調から次第に暗い曲調へ移ってゆくようにした。」

「序曲」イ 長 調

ヴェルキイー

ロマン・ヴェルキイーはドイツのプレクトラム界の先駆者であり、マンドリン・オーケストラとしての革新的な形式を確立した。

24年20才の時、処女作「序曲イ長調」を発表して以来「五つの序曲」「交響曲」「帰郷」「大いなる時」、など多くの名曲を書いた現存の作曲家である。彼はプレクトラム音楽を機能的に構成し、種々の管楽器とのコンビネーションはダイナミックで、作風は非常にマンドリン風であると共に管弦楽風の効果をもち、イタリア人にみられないドイツ人独特の重厚味を感じさせる。

この曲はOP-1の雄大な序曲で、その構成の素晴らしさと、ロマンチックな簡潔なメロディーは聴く者を魅了せずいられない。それは傑作を物語っていると同時に、ドイツ人の理想に最も適合していると言えるであろう。

幻想曲「麦まつり」

マチョッキ

マチョッキの名はマンドリン奏者には親しい。彼は数多くの合奏曲をかいている。麦祭りはその中でも愛好される。夜明けと共に麦の収穫を祝う祭りの日、教会の鐘は鳴りひびき村人は感謝の祈りを捧げ喜びあふれ（男声コーラス）、音楽をかなで踊る。やがて夕暮れの空の彼方に感謝の祈りの歌は消えてゆく。原譜には作曲家自身終わりのコーラスは、ステージのかげで歌うことを指定している。

1 夜 明 け

ギターの壮麗な響きが、朝の訪れをつげる。黄金色に実った麦が、夜明けとともに、輝きを増して、いったばかりに、目に入る。

2 楽しきめざめ

麦の大豊作を祝うかのように、教会の鐘が鳴り響き、村人たちは、手に手を取りあって畑に出かける。すばらしい収穫の朝だ！

3 麦の唄

人々はこの感激を歌う。そして踊る。みんなで輪になって高らかに声を合せ、その喜びの歌声は、今までの苦勞を忘れさせるかのように大自然にこだまする。

4 祭のあと

やがて、夕日が地平線の彼方に沈み、村の家々の窓に明かりがともる頃、豊かな麦の収穫を感謝する壮麗な祈りが、たそがれの中にいつまでも、いつまでも流れ行く。その消えた後も人々の心の中を流れ行く……。

小交響曲「マンドリンの群れ」

ブラッコ

* Bracco がマンドリン・オーケストラのために書き降ろした最も充実した構想を持つ、スケールの大きな作品。I **Mandolini a Congresso!** という標題は「マンドリン、みんな集まれ！」というような意味であろう。Pezzo Sinfonico という副題は「交響的断章」ということで、大編成で演奏するのにふさわしい。1901年に作曲、翌1902年に「イル・マンドリーノ」誌主催の作曲コンクールで第1位となり金牌を送られた。

第1楽章 Allegro 冒頭の短い序奏に続き、全曲を支配する動機が姿を見せ、やがて第1主題として確定される。この後で、これを対称的な簡素の中にも情熱をこめた第2主題が現われるが、一度もり上ったものの、第1主題にひきつがれ、静かにこの楽章を終る。

第2楽章 Adagio 10小節間の序奏にひきつぎ第1主題の展開された姿が再現されます。ここではプレクトラム楽器のカンタービレと、スタッカートとの対比が十分に生かされ、限りない美しさに満ちあふれた楽章である。

第3楽章 Finale Allegro 第1主題、第2主題が変奏曲風に現われる。そして、第1主題は段々と高調し、感動的な **Grandioso** に入る全パート最強奏によるこの部分は、この曲の絶頂を形づくり、やがて **Meno** に入り曲は一端ここで静まり、再び第1主題が一気にかげぬけこの曲を終る。

序曲「エグモント」作品84

ベートーヴェン 作曲

この序曲は、ゲーテの悲劇「エグモント」のために、劇中音楽として作曲されたものの1曲である。それは、スペインのフィリップ二世の圧制下にあったネーデルランドの独立をはかり、悲劇的最後をとげた愛国者エグモント伯の一生を描いたものである。この悲劇はアルヴァ大公の裏切りによってひきおこされたもので、このためエグモント伯は雄図を達成することができず、断頭台の露と消えた。この悲劇をベートーヴェンは大変感動をもって読み、劇中音楽を作曲したのである。

序曲は3部分から成立っている。

第1部 力強い緩徐楽節であり、エグモントの宿命的な運命あるいはエグモントを救うための住民の叫びなどを表現するといわれる。

第2部 急速調であって、圧迫と恐怖、エグモントの強い信念と性格、その殉難、クレルヘンの純真な愛などを表現するといわれる。

第3部 ここで長調になる。死後の精神的勝利、やがてネーデルランド民族の自由な独立を暗示するように感じられる。

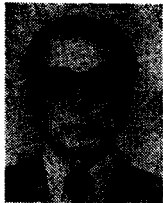
ピアノ協奏曲二長調K537「戴冠式」

モーツァルト 作曲

モーツァルトは、ほとんどすべてのジャンルに数多くの作品を残しているが、協奏曲の分野でも、大部分の独奏楽器のためにすぐれた作品を書いている。中でも最も数多く作曲したのがピアノ協奏曲で、23曲におよんでいる。これはモーツァルト自身がピアノ演奏家として、彼自身が使用する目的で作られたものである。今日演奏される曲は「戴冠式」の名称によって、今日なお、とくによく知られているものの一つであるが、1788年、ウィーンで完成されたものであるが、これは34年の短い生涯のうちの31才の時のことであり、「戴冠式」と副題のついた由来は、当時彼はウィーンのオーストリア宮廷の宮廷作曲家の称号を授けられており、前帝が亡くなり新皇帝が戴冠式を挙げた

が、その直後、市立劇場で開催された彼の演奏会に演奏されたことによるが、それより以前に出版されたときすでに「戴冠式協奏曲」と名称がつけられていた。管弦楽部に、めづらしくクラリネットが使用されていない。また、独奏部は独奏者の投巧を示すように、華やかに書かれている。

曲は3つの楽章に分かれており、第1楽章は明るい二長調で快速に、流れるように優美に演奏される。第2楽章は、やゝ速くと指定してあり、おだやかな旋律が美しい。第3楽章は Rond 形式で、快活な主題が何回もくりかえされる。



ご あ い さ つ

県芸術祭30周年記念音楽会

実行委員長 秋山 アキラ

「県芸術祭の30周年を記念して、何か例年の芸術祭では出来ないプログラムを組もう」と委員会はプランを練った。

演奏団体は、平素のメンバーの枠を広げて一般からの参加を募る、各部門が合同して演奏できるような曲目を選ぶ等苦心の結果が今日のプログラムである。

この秋は、ミレーの名画購入に触発されたわけでもないだろうが、芸術の秋は実に盛だくさんだった。やはりそれは、30年の実績が積み重なって花開いたものだろう。

戦後、荒廃の中に開催された芸術祭、昭和28年世界の名テナー、ヒッシュの招聘、ベートーベン「第九」の初演、オペラ「手古奈」「鷹の泉」、作曲公募、コンクール、音楽祭、合唱祭、「第九」の再演、再々演等、試行さく誤とも思えるそれぞれの行事も、ふり返れば着実な足跡になっている。記念の県民愛唱歌「緑のふるさと」も出来上った。この30年の節を、さらに心のふるさと作りの第一歩として、ただただ前進を願うのみだ。

緑のふるさと

作詩 岩谷時子

作曲 浜口庫之助

一、あなたがいる私がいる子供達がいる

手を振ろう私たちのブルー・ブルー・スカイ

青空と山に抱かれて愛し合う友達ばかり

はるかなる雲よ牧場よ声高く呼べば答える

緑の山なみアルプスの嶺よ

二、桔梗が咲く桜が咲く月見草が咲く

ふりそそぐ私たちのサン・サン・シャイン

太陽と風に包まれ山裾は豊かなみのり

はてもない空に歌えば呼び返す若い微笑み

想い出見つけに又おいで旅人

三、流れがある谷間がある湖が光る

今日は雨私たちのグリーン・グリーン・フィールド

草原は霧にかくれて山梨は静かに眠る

あの人はどこにいるのか甦える恋の思い出

幸せあふれる大好きなこの街

30周年記念音楽会実行委員

秋古内小近小望	山沢藤松藤野月	亮喜郎武雄知子	夏義寿幹雅美喜子	三浅中一武小吉	井川島瀬藤泉屋	純豊恒純信千枝子	清夫雄一之泉	田小有野中沢堀	中池井沢村田内	郁寿長正洋	子郷雄治淳一岳	柴藤飯米長太中	田巻島山田田山	了信国恒明良博	一夫男夫男子文	篠近窪小大秋武	原藤田川庭山藤	ますみ子雄夫郎江次郎	ま礼良昭三春雄
---------	---------	---------	----------	---------	---------	----------	--------	---------	---------	-------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	------------	---------

(順不動)